

石川淳選集

第十二卷

石川淳選集 第12巻 (全17巻)

1980年10月7日 第1刷発行 ©

定価 1300 円

著 者 いし かわ じゅん
石 川 淳

発 行 者 緑 川 亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋2-5-5
発 行 所 株式会社 岩 波 書 店

電話 03-265-4111
振替 東京 6-26240

印刷・精興社 製本・牧製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

目次

渡邊崋山

五

筑摩叢書版「渡邊崋山」後記

一六

二葉亭四迷

一七一

岩野泡鳴

一九

岡本かの子

三六

太宰治昇天

二四

安部公房著「壁」序

二五

安部公房君鐫印

二六

安吾のゐる風景

二五

六世歌右衛門	二八一
敗荷落日	二八四
初芝居三ツ物	二九二
宇野浩二	二九四
武林無想庵	三〇六
わが万太郎	三一九
俳諧萩すゝき	三二三
めぐりあひ	三二五
三好達治	三三一
丸谷才一著「食通知つたかぶり」序	三五三

評論隨筆

二

渡邊崋山

生れたときに、眼があかなかつた。榮養がよくなくなつたせゐであらうといはれる。眼のことはともかく、たしかに家には榮養が行きわたつてゐない實狀であつた。そのくせ兩親とも血統正しく、家格卑しからず、心にも生活にもよごれのない人柄であつた。しかし、眼はやがてあいた。きれの長い、ふかふかと溫い眼で、後年椿椿山が描いた肖像の、當時四十六歳の軀幹^{ゆた}胖かなる人物の、かのうつくしい眼がここに初めて開き、もう人間の世界で消えつこない星であつた。

すでに二歳のとき、ある僧がこの子を見てかういつたと傳へられる。「いい子だ。立派に成長することし

か知らない。だが、人間が立派になるにつれてそれだけ餘計に不幸の量を背負ひこまされることにならう」と。その不幸が實際にどういふものかは、時代と世の中と人間のうごきとの關係に於てそれを見届けるまで、たれにも判るはずはなかつた。しかし、人物については、即座にぴんと来るそのみごとさに、たれでも避けがたく胸を突かれた。相學に達した根津新幡隨院の和尚とやらにはかぎらず、なにものかがどこかで右のやうな豫言を發したにちがひない。げんに、兩親でも、師友でも、敵でも、まだ事のおこらないさきから、ただですまぬしろものだと、めいめいの立場でうすうす勘づいたふうであつた。

ひとりだけの幸福のことなど一生に一度も考へるひまがなかつたほど、ひどくいそがしい運動で、この人物の精神は生活をつらぬき通した。おまけに、藝術といふもう一つの世界で、美神に召された仕事があつた。

こどものときの名は虎之助、長じて通稱登、渡邊氏、
諱定靜ただやす、字伯登一に子安、畢山または全樂堂、隨安居
士と號し、他にいくつかの別號がある。畢山といふ號
は最初の儒學の師鷹見星臯がつけてくれたもので、も
と艸冠の華山であつたが、後に（三十歳頃といふ）中國
五岳の一である畢山が山冠なのにしたがつて、さう改
めた。以後この不朽の名で、この人物を呼ぶことにす
る。

徳川十一代將軍家齊の治世、寛政五年九月十六日、
江戸半藏門外田原藩邸に、畢山は生れた。

寛政五年は西曆一七九三年に當る。それがフランス
革命のおこつた年だといへば、當時の世界情勢をわざ
わざ説き出すにもおよぶまい。そして、日本がその世
界情勢について知識を得、交渉を持つたのは、長崎の
オランダ人の媒介に依るのみであつたとはいへ、この

頃からそろそろ鎖國では押し通せさうもない風向が見
えてゐた。すでに前野良澤、杉田玄白等に依つて西洋
の學問に内薄しようとする運動がはじめられ、伊能忠
敬の測量の業もひそかに著手され、幕府は内政の改革
とともに海防の必要をさとらねばならぬ狀況にあつた。
げんに、ロシヤ船が北邊に迫つて、わが漂流民を返送
する機會に交易を求めて來たのは、つい目前の出來事
であつた。

しかし、それでもまだ江戸は安泰である。いや、後
世のわれわれが持つところの江戸概念に相應するやう
な江戸はこれからはじまる。そこだけが位置を分離し
た別天地のごとく、江戸の世界といふものが我儘に出
來上つて來て、泣くにも笑ふにも、ひとびとは他に生
活の場所も方法も考へられないふぜいである。前に安
永天明を受け、後に文化文政を控へて、この前後數十
年間はたしかに吉宗の享保以後江戸きつての盛時に相

違なく、諸事どんなふうにも繁昌したかは、手近の文學史なり、浮世繪史なり、演劇史なりをのぞけば、さらに書いてある。そして、江戸の一番いいところも、またこの時期がにぎつて放さなかつた。

寛政頃の江戸市井の時花ことばに「これは日本だ」

といふのがある。何事につけても最上級を示す文句である。日本が最上級だといふことには毫末も異議があるはずはないが、ただしこれはほかのことについては薯の煮えたのも知らない評價であつた。「につぼん」とはなはだ江戸的だといふ意味の掛聲で、じつは江戸以外には日本のことさへほとんど知らなかつた。では、そんなに珍重がられた江戸とは、そこで営まれた實際の生活とはどういふものか。それは決して、すくなくとも文學が美化し通人が感に堪へるほど、豊富な内容を持つたものではなかつた。

便宜上、一つだけ例を擧げるとどめる。食物のこ

とである。由來、江戸は山海の幸にとばしい土地である。わづかに近在の平野が蔬菜を保證してゐるほかには、交通不便のため他から珍味は移入されず、江戸灣は瀬戸内とちがつて魚介の量も種類も多くない。したがつて海の芥に類するノリまでが漁り盡され、カツヲのやうな鰯に肉の落ちた魚が格を上げられた。ただ無い袖をどう振るかといふ才覺のしどころに、江戸の料理法が發達したばかりである。こまかい細工がいろいろ發明され、それをたのしがる癖がついたので、狭い土地の中では豐饒としか見えなかつたであらうが、外部から眺めれば貧弱としかいひやうがない。だが、その中で生活しつつあるひとびとには貧弱の相は眼に入らないのだから、通人は安心して額を叩いてゐられたわけである。

これから類推して、おなじやうな事情を精神上の件に持ちこまうとするのは、もちろん禁物である。しか

し、遺憾ながら、江戸の生活がとくに精神のはうで豊富であつたともいひがたい。いへることは、それにも係らず、寛政前後何年かの時代が前述のやうに江戸の一番いいところをにぎつてゐたといふ事實である。けれど、豊饒でもあり貧弱でもある右の江戸世界に、この時代の文化が一途に徹底したからである。證據は文學に、いはゆる軟文學に求めることができる。軟文學でも、この時代の仕事は一番純粹で、高次に見受けられる。だが、さしあたり文學論のために割くべき章はないので、説明は省略しておく。

ところで、一體右の注意は嶺山と何の關係があるのか。

一つは、嶺山がその青春期をかういふ江戸で生きたからである。嶺山の二十歳は文化九年、三十歳は文政五年に當る。すなはち、江戸全體ではうつくしいものがやや下り坂になりかけたところの、幕府の政治では

松平定信の影がうすれて行つたところの、市井の流行では趣味が河東節から清元節に移らうとしたところの、その時期である。嶺山はその眞中に鋭敏な感受性をさらしながら、決して江戸の市井的な生活現象に流されることもなく、現象を支へる要素をわが身に導入しようとしなかつた。きびしくそれらの外側に立つてゐたのだが、しかもそれらを反撥するほど、あるひは敵視するほど、窮屈な生れつきでもなかつた。このことはこの人物の振幅を大きくさせ、性格をゆたかにさせてゐる。右の消息をここで承知しておかないと、ひとは時として嶺山を見うしなふおそれあらう。

もう一つの理由は、この時代と渡邊家の暮しむきとを對照させるためである。一般に生活は低かつたといつても、ともかくはなやかな時代であつたのに、すでに將軍の膝許で、小身の俸祿生活者である武家の内證は次第に切迫し出してゐた。とりわけ渡邊家の生計は

ひとをして眼を掩はしめるやうな慘狀を呈してゐる。
畢山の生涯はまづそこからはじまつた。

二

渡邊氏は田原藩の世臣である。三河國渥美半島の田原、一萬二千石、藩主三宅氏は兒島高德以來の名家ではあつても、封小さく、財に富まなかつた。江戸の藩邸は半藏門外、今日三宅坂の名が残つてゐる附近にあり、また巢鴨にも別邸があつた。畢山が生れた當時、渡邊家が屬してゐたのは麴町の邸のはうである。

渡邊氏の先祖は越後の士、祿八百石、田代圖書といふ者だが、その子孫が他姓を冒して累代三宅氏に仕へ、藩老の列にもつらなつた。畢山の父市郎兵衛定通は寛政四年七月（畢山の生れる前の年）二十八歳で家督相續し、十五人扶持を受け、後おひおひ進んで、晩年には年寄役末席、百石四人扶持に至つた。しかし、實

際に受け取る祿高は額面以下なのが常であるから、他の事情がなくとも、家計ゆたかとはいへないはずであつた。

定通は羸弱で二十年にわたり長病に悩んだ人物である。地位が上つたといつても、格別のはたらきはなかつたのであらう。病名は明かでないが、足腰はどうやら立つた模様で、ただ身心ともにおとろへ、いつも藥餌を離すことができなかった。だが、この人物はまた巴洲と號し、學を好み書を愛し、書の見るべきものは手寫して家に藏し、畢山の薰育には心を用ゐたやうである。畢山の母は河村なにがしの女と傳へられるのみで、事迹がはつきりしてゐないが、その貧居に於ける取置、後年畢山自決の際の態度などから察すると、勝氣で著實な婦人であつたらしい。

すでに食祿の微小、定通の長病に依つて生計の道は暗くされてゐたが、さらに渡邊家には養ふべきことも

が多かつた。ここで、畢山の弟妹のうへをざつと見たしておく。

渡邊家には五男三女がある。長男は畢山である。次男定意は十三歳館林善道寺にて僧となり、文政十三年二十何歳か、武州熊谷で死んでゐる。三男喜平次は他家の養子となり、文政十二年これも若死である。四男助右衛門は岡崎藩士中山氏を繼ぎ、これには畢山が最期に遺書をおくつてゐる。五男定固は如山と號し、囑目すべき秀才であつたが、天保八年二十六歳で没してゐる。長女もとは桐生岩本氏に嫁し、これは慶應三年七十三歳まで生き、男に喜太郎がある。次女まきは他家に嫁し、三十二歳で逝き、三女は夭折してゐる。

右のやうに、畢山よりも生きのびたのは四男助右衛門と長女もとの二人だけで、他はみな三十歳前後までに早逝してゐる。(ちなみに、畢山の没年は天保十二年四十九歳である。)そして、長じて生家に留まつた

のは長男畢山のほかに五男定固がゐるのみで、他はとごとくよその家に入つてゐる。おそらく定固とても、もつと早く生れたとすれば、他の兄たちとおなじく生家を出るべき運命に置かれたであらう。定固が成人しかけた頃には、畢山は藩の要職にすすみ、畫名もあがつてゐたので、依然として貧しくはあつたものの、末弟の才を惜しみ、その勉學を助けることができたのであらう。

この弟妹の離散と早逝については、後年になつて畢山みづから當時の事情を書き残してゐる。「退役願書」女子はともかく、男子がみな他家の養子となつたのは、決して懇望されたからではなく、良縁あつたのこともなく、または相當の支度をととのへて遣したのでもなく、ただ貧窮のために、はだかのまま「親不知之如くに」逐ひやられたにほかならぬ。ことに次男定意との生別は慘楚をきはめた。畢山は母とともに

板橋まで見送りに行つたが、ときに雪ちらちらとふり出し、弟は容赦なく「あら男」の手に引き取られ、引きずられて遠く去り、眼路凍つてなにも見えなかつた。そして、悲劇はさらにつづいた。

「兄弟過半非劫同様之病死に御座候。これを以て其始め能く困難至急の義御察可被下候。私母近來迄、夜中寐候に蒲團と申もの、夜著と申もの引かけ候を見及不_レ申、やぶれ疊の上にごろ寐仕、冬は炬燵にふせり申候。」

一家は「人のあなどり」を忍びつつ、借りられるだけ借り盡し、疊建具のほかは質に置き盡し、しかも窮乏は刻刻迫つた。南鐐一片のくめんのために、母は寒夜に幼児を負つて、知るべの山伏をたよつて本所まで行き、そして歸つて來たその母のために、畢山は湯を沸かさうとして、きものを焦がしたので叱られたといふ思出があつた。

畢山の少年時代に於て、このやうな状態はとくにはげしかつた。といふのは、こどもたちの年齢から見ても、ちようどその頃の渡邊家には、發育ざかりの小さい群が一所にごたごたとかたまつて、病父の枕許で生唾をのんでゐたからだらう。

みごとに、少年の畢山はそのときたつた一つの考へ方しかもたず、他に餘計なことはなにも考へなかつた。まはりで捏ねかへさずに、いきなり現場に身を叩きつけて行つて、そこに生きいきとものを考へる道を見つけた。あたへられた状態を突き抜けて、肉體がただちに精神と交渉した。一生を通じて、それが畢山の流儀であつた。

三

畢山は二歳の頃、一時巢鴨の邸内に移つてゐるが、これは父定通の勤務の都合である。

八歳、藩主康友の世子龜吉の伽役を命ぜられた。

十一歳、父定通が藩の老公康之の附を兼ねることになつたので、ともに巢鴨に移つたが、その年康之の逝去に依りまた半藏門外にもどつた。そして、元どほり世子の伽役を命ぜられた。

この世子の伽役はまんざらわるい役ではなかつた。世子は幼少でまだ詩書の講義を受けるには至らなかつたが、舞とか謡とかを習ふとき、華山もその席に列することゝえた。稟質のほかなに一つ頼むところのない少年にとつては、そんなものでも教養のはしくれであつた。

文化元年、十二歳になつた。この年にはいろいろなことがあつた。先年北邊に迫つたロシヤ船が今度は長崎に來て交易を求めたので、幕府は應接のために遠山左衛門尉等一行を派遣した。華山の後年の盟友、高野長英もこの年に生れた。渡邊家では定通が用人に任

ぜられた。華山も三月から月俸を給されることになつた。そのほかに、華山の身には忘れがたい一事件がおこつた。

ある日、華山は日本橋邊を通行したみぎり、岡山藩主池田氏の子某の行列に出逢ひ、その供先を切つたので、供の者に捕へられ、打擲された。行列の主、池田氏の子某は華山と同年輩の少年であつた。後に、華山みづからそのときの感慨を記して、「同じ人間にて天分とは申ながら發憤に不堪、今より何なりと志候はば如何なる義にても出來可_レ申存……」といつてゐる。

その「今より何なりと」といふのは、實際には儒學を修めることであつた。田原藩の祐筆に高橋文平といふ者がゐて、これは年長者だが、かねて氣が合つてゐたので、高橋の世話で、翌年十三歳、初めて鷹見星臯の門に入つた。鷹見星臯は藩の耆宿で、父定通もかつて教を受けたことがある達識の老儒であつた。

かういふ崋山のうごきに、またその後のうごきに、

十二歳のときの屈辱的な事件がひびいて來てゐるにはちがひなからう。しかし、その影響の部分をさう過大に見つめることはできない。この事件がおこらなくとも、崋山はやはりおなじ方向に進んで行つたであらう。ただ屈辱が崋山を刺戟して、即座に方向を見定めさせたのだと思はれる。屈辱の中に氣持をもやもやさせる代りにそれを機會として自分の速さを増すといふやり方で、崋山は事件を處理してゐる。總じてものに拗ねたり、ひねくれたり、自分で感情をにがして、見當ちがへにうろつき出るやうな人物ではなかつた。あたまの上を踏み越されたのも知らずに、のろのろ地べたを這つて行つたのは、大名行列のはうであつた。なぐられたことから、崋山はすでに心を洗つてゐた。

十四歳の年、世子龜吉死し、元吉(康和)世子に立ち、崋山はまたその伽役になつた。父定通は世子の傳並び

に奥向用係を命ぜられた。しかし、前述のごとく、この頃渡邊家の窮乏はなはだしく、安穩の日は絶えてなかつた。その状態につき、崋山は逡巡せず、いはば自分で責任を取つて、幼弱の手で貧困に立ちむかひ、まづ一家を興すことに努めようとした。なによりも金錢をうる必要があつた。元來、儒學に志したのも、學問のためといふほかに、それに依つて活計の道を求めるといふ實際上の目的があつた。だが、現在の未熟の修業が金錢に代へられるのはいつの日のことか。一方、現状は寸刻の猶豫も許さなかつた。

このとき、高橋文平がある注意を提出した。畫を賣ることにしたらばどうか。ずつと幼少の頃から、崋山は畫を描くことが好きで、またそれが非常にたくみであつた。ルネッサンスのある畫家のやうに、地べたに畫いて遊ぶほかの遊びを知らなかつた。家に客が來ると、さつそくその顔を寫して眞に迫つた。ここで他人